

感 謝 の 辞

42年間にわたり東北学院大学で神学研究とキリスト教教育に当たられた佐々木勝彦先生は、2016年3月末をもって御定年により東北学院大学を退職されます。

佐々木先生は1963年に東北学院高等学校を卒業、東北学院文経学部経済学科卒業後に、基督教学科に学士編入して二年間学ばれました。その後1974年東京神学大学大学院博士課程前期および後期課程を修了された後、同年文学部助手として本学に着任され、文学部専任講師、助教授を経て1986年4月に文学部教授に昇任されました。

1999年から2001年まで基督教学科長、2005年から2007年までキリスト教学科長、2008年から2012年までキリスト教文化研究所所長、2011年から2013年まで東北学院幼稚園長および学校法人東北学院評議員を歴任され、文字通り東北学院の発展に御尽力くださいました。

基督教学科の卒業生としてご自分を「キリスト教学科の第二世代」と位置付けておられる佐々木先生が助手として本学に着任した時は、「キリスト教学科四〇年史」の記述によれば、折しも高名な教義学者の熊野義孝教授や新約学の山谷省吾教授の退職に伴う新旧交代の時期であり、学科の入学者が激減していました。本学における伝道者養成とキリスト教教育の位置付けが変化し、定員を満たさない学科として大学内での風当たりが強まっていた非常に困難な時代でした。「本学科卒業生のうちでは最初で（さし当り現在までのところ）最後の学科専任教員となる」との一文には、佐々木先生が学科の次世代を担う組織神学部門の倫理学担当者として、その将来を嘱望されていたことが伺われます。

実際佐々木先生は本学に着任した直後より、近・現代ドイツのプロテスタント神学の研究と紹介に精力的に取り組んでおられます。80年代の終わりまでは基督教学科の紀要『教会と神学』にパネンベルクやH.ヘルマン、E.トレルチに関する論文を寄稿し、1994年から2004年まではJ.モルトマンの神学の構造について、キリスト論、聖霊論、終末論、神論と順を追って組織的に研究し、『教会と神学』および1983年に創刊された『キリスト教研究所紀要』に寄稿しておられる他、今日まで現代ドイツのみならず、欧米の神学の研究と紹介を継続的に刊行し、神学を学ぶ者にとって大きな助けとなっています。

その後、佐々木先生はキリスト教教育部門の責任を負うことになり、キリスト教教育の領域でも重要なお働きをしています。2004年以降日本におけるキリスト教教育の歴史の

研究と取り組み、基督教教育同盟会編『基督教主義中学校及び高等学校宗教教育教科書』の内容とその特質について、戦後初期から1959年までを検証しています。こうした地道な作業について、それは後進のために重要な資料を残す必要があるからだと言ったことがあります。また2001年以降にはキリスト教教育の手引きとなるような著書を刊行し、聖書や著名な宗教者、自己超越、非暴力と平和や日本人の宗教意識とキリスト教の問題等を扱っておられます。先生のこれらの著述活動を、キリスト教教育の実践にはどうしても「自ら学び続ける教師」が必要であると語っておられた先生の言葉と重ね合わせる時、先生の教育者としての一貫した姿勢を感じます。

私が2006年に本学に着任して程なく、キリスト教学科が再度学科存続の危機を迎え、総合人文学科への改組の計画が徐々に進められました。様々な折衝を経て学科が伝道者養成の使命とキリスト教主義大学における人文主義教育の両方を担うことによって新学科への改組に至りましたが、当時の佐々木先生は「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」（ロマ5：3-4）とのみ言葉を身をもって示されました。かつてのご経験からこの困難を乗り越える手立てを得ておられたのだと思います。そうした困難な状況の中で、佐々木先生は今日まで一貫して学生の指導に情熱をもって取り組んでこられ、その指導を受けた者は各地の教会で伝道者や中高の聖書科教師として活躍している他、社会福祉の領域や各種企業において善き働きをしています。心より感謝申し上げます。長い間どうもありがとうございました。

ご退職後は、4月からご子息一家が住む広島に居を移され、これまで扱うことのできなかった神学書の研究を行うのを楽しみにしているとお話を伺っています。先生が益々のご健勝のうちに、総合人文学科の教育と研究の発展のためにご支援くださいますことを祈念いたします。

(出村みや子 記)